

〈令和3年度第44回ペスタロッチ祭最終講義〉  
(令和4年3月4日)

## 私の教育臨床学，私の筑波大学35年

庄 司 一 子

〈令和3年度第44回ベスタロッチ祭最終講義〉

〈令和4年3月4日〉

## 私の教育臨床学，私の筑波大学35年

庄 司 一 子

実は、12月に女性の先生方に歓送会を開いていただき、今年で35年、大学にいたと申し上げたのですが、筑波大で学生と大学院生の時代も過ごしておりますので9年足すと44年。大学院終えて岩手に3年半おりましたが、その時間を除けば、大学生以降、ほとんど筑波大学という、身体はほとんど筑波大学、という人間です。それで僭越ながらこのようなタイトルにさせていただきました。

教育臨床学は、私が担当してきた専門科目です。私は山形県山形市で生まれました。今、井田先生に大体ご紹介いただいたので、自己紹介は省略させていただき、本日の話は、「私の教育臨床学，筑波大学35年」ということで、お話しさせていただきます。

私の専門は、大学と大学院が心理学のため、ここにいらっしゃる先生方、ほとんど教育学の先生で、具体的にどういうことかあまりご存じない方もおられるかと思います。また、私は筑波大学で44年間過ごしたわけですが、そのときまだ生まれてない方もこの中にはたくさんいらっしゃると思いますので、少し私の専門をお話しさせていただきますと、発達心理、臨床心理、教育心理、教育臨床学、そして学校心理学。この辺りが私の専門領域です。

発達心理学と臨床心理学で、子どもの成長、発達、発達段階、子どもの臨床等を学びました。たとえば、子どもの発達の中で、反抗期が非常に大きな意味を持っていることを学生時代、学んだわけですが、臨床の中でさまざま方々にお会いする中で、その重要性を感じるようになりました。また、私が大学で学んだころの発達心理学では、大人になったら発達は終わり、あと

はもう下降をたどる、私も実際、今、その段階にあるわけですが、アメリカで老年心理学が発達し、1980年代はlife-span developmental psychology、生涯発達心理学という学問が台頭して、生まれてから死ぬまで全てを発達と考え、大人の心理も盛んに研究されるようになりました。私が大学院生の時、生涯発達心理学がアメリカで盛んになり、学会で老年心理学の部門に参加しようと思い、その部門の部屋に行ったらご高齢の方しかおらず、帰ってきたということがありました。まだ日本では関心がもたれ始めた頃でした。

また、臨床心理学、これは人格の形成とか、不適応と精神病理、特にこの精神病理では異常、abnormal psychologyを学んだわけですが、アブノーマル・サイコロジーの、アブノーマルというのは、日本では最初に「変態」と訳されたと教わり、異常心理と学びました。人間の特性は多くの場合、心理学的には数量的には正規分布するのですが、アブノーマルとは、正規分布の両極端のこと、つまり平均値からすごく離れている少数の人たちのことをアブノーマルと捉えています。さらに、心理療法やカウンセリングについても、学生時代学びました。当時、キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』を読んで、非常に衝撃を受けました。やはり死の病に直面している方々は、誰にも自分の胸の内、自分の気持ちや思いを伝えられずに亡くなっていく。当時はインフォームドコンセントというのもなく、本人が事実を知ったらあまりにもショックを受けるということを配慮し、みんながその方が亡くなるということを胸にしまって本人に伝えずにいたわけですが、でも実は、本

人もそれをうすうす感じ、しかしだれにも言えずとても苦しい思いをしている。そこにそのキューブラー・ロスという精神科医が、そうした患者さんに向き合い、いろいろ話を聴いていくわけです。その中で、死に直面している方々の心理過程に一定のプロセスがあることが明らかにされました。まだ読んでいらっしゃる方はぜひ読んでほしいと思います。

また、ミッチ・アルボム著『モリー先生との火曜日』は、1997年出版され、アメリカでベストセラーになった本です。この本は、難病ALS（筋萎縮性脊索硬化症）を患った大学の恩師に、著者でコラムニストのミッチ・アルボムが先生に会いに行き、先生に会っているうちに、先生はもう寝たきりなので、先生を励ますつもりで行ったのに、結局先生と会って帰ると、だんだん自分が元気になっていることに気づいて、たとえ病床にある人でも、人はいろんな力を持っている、そういうことに気づいていく話です。私たちは、そのようにたとえ病の床にあっても、人との関係の中でいろんな力を持ちうるのだ、ということはこの本で学びましたし、そういう難病に直面しておられる方でも、そうやって会いに来た人たちを励まし、勇気づけ、そして気づかせることができる、ということを学んだ本です。

どちらも今まで読んだ本の中で、自分の中では大切な本ですが、大阪大学の鷺田清一著、『聴く』ことの力』、この本も多くの刺激をうけた本です。自分の専門はカウンセリング、臨床心理学ですが、今、科学技術が進歩し、ものすごい勢いで社会が変わっている中、私たちは本当に一瞬たりとも待つことができなくなっています。何でもできるだけ早くすませたい。食べることもそうですし、どこか行くこともそうですし、仕事をするときも、とにかく早く、早く、時間をかけずにとまって過ごしています。科学技術は便利に、早く、間違えずに、安く…、とそれを目指してきたわけですが、教育もだんだんそうなっていますね。学校の先生方も、私はいろんな先生と接しますが、よく、「どうしたらいいですか」と聞かれます。だれでも、困っ

たら、どうしたらいいかって考えると思います。ただ、子どもの問題に関しては、どうしたらいいかということは簡単に答えられることではないし、やはり先生方が子どもたちと対面していく中で、いろいろ考えながら時間をかけてやっていくということが大事なことです。特に、不登校からひきこもりになられる方は多く、今現在、100万人ぐらい子どもから大人までひきこもりの方がいるわけです。そういう方たちは、本当にこの「時間」ということと対峙して、毎日毎日過ごしておられる。ある意味、待ってもらえなかった結果として、こういうことが起こっていると考えられることもできると思います。

今、私が授業で担当している教育臨床学やスクールカウンセリングですが、主に臨床学の中で、子どもの問題や、不適応などを扱っていったら、この問題の背景に何があるのか、どういふふう支援していくのがいいのかということ、ずっと講義してきましたし、学生と一緒に考えて学校や生徒を支援してきました。また、最近、学会は学校心理学や、国際学校心理学に出ることが多いのですが、学校の中で教育が営まれる、その中で心理学をどのように生かしていったらいいのかということを考えて、学校心理学の示唆が非常に大きいと考えるようになり、今は、学校心理学を中心に研究や学校支援を進めています。

次に、私の臨床の軌跡についてお話ししたいと思います。

1976年、自分が大学の2年生のときから、当時、さまざまな発達上の困難を抱えた自閉症や自閉的傾向のある幼児、児童、保護者の方や学校の先生と出会い、関わって、仲間と先生の手伝いをしながら臨床の活動を進めてきました。この中で出会った人々ということで、お話ししたいと思います。

最初に、この子どもの問題は周りが作るんじゃないかということで、「死にたいと訴えるお子さんの事例」についてお話しします。このお子さんの事例はよく授業でも話しているのですが、小学〇年生のお子さんのお話です（個

人情報に関わるので皆さまの資料には具体的にはお示ししておりません。よろしくお願ひします)。このお子さんは当時小学〇年生で、死にたい、死にたいと言う、ということでお母さまがお子さんを連れて相談室を訪ねて来られました。Aさんは駅のホームから飛び降りようとしたり、マンションのベランダから飛び降りようとしたりを繰り返すということでした。また、Aさんは、毎日学校で担任に叱られている、とのことでした。クラスで問題児扱いされていたようです。クラスで困ったことがあると必ず「また、〇〇ちゃんでしょ！」と先生に叱られる。本人がいくら「違う！」と訴えても、〇〇ちゃん！と決めつけられ、叱られることが毎日繰り返されていたそうです。

相談を受けたとき、私自身はその子どもの気持ちをごく心配しました。小学〇年生で死にたいってよほどのことだと思いました。ただ、お母さまはお子さんの訴えに対してそんなに心配しておられない様子で、親子の気持ちに違和感を覚えました。

このお子さんとは、プレイセラピーをして一緒に遊び、お母さまとはカウンセリングをしていきました。お子さんはプレイセラピーを通してだんだん元気になっていきましたが、お母さまの方は、このお子さんに対して、当初、非常に手がかかる面倒くさい子という受け止め方しておられたようです。ですから子どもがどんなに騒いでも、あー、また始まったくらいに感じておられ、学校で先生に叱られるのもそのせいだ、という受け止め方でした。少々騒いでも、お母さまの受け止め方がそのような感じでしたので、学校での教師からの叱責とも相まって、お子さんの訴え方がだんだんエスカレートして行ったと思われます。一般に、小さいお子さんは自分で対処できない困ったことが起こると「赤ちゃん返り」をするわけです。例えば一旦おむつが外れた子どもでも、またおねしょをしたり、自分で食べられるようになったお子さんでも、食べさせてほしいとねだったり。そんな風に下のお子さんが生まれると、よくそういうことが起こるわけですが、このお子さんも面接

を重ねる中で、そういうことがだんだん始まりました。洋服がうまく着られないから着せてほしいとか、ご飯食べさせてほしいとか。そういうことが、プレイセラピーを進める中で同時に起こってきました。お母さまは面倒くさいなと思ひながらも、子どもにちゃんと対応していくと、だんだん子どもは元気になって、死にたいということをやわなくなりました。

お母さまにしてみると、なんだかんだ面倒くさいし、先生が毎日この子を叱るのはしょうがないって受け止めておられたのですが、プレイセラピーをしてお子さんがだんだん落ち着いていった頃、ある日、そのお子さんが私に、「僕、最近先生から叱られなくなったんだ」と教えてくれました。

また、そんなことがあった頃、お母さまが学校から呼び出され、担任の先生から、「(校長からの話で)学校に保護者の方から苦情があったそうなんですけど、苦情を入れたのって、おたくですよ」って言われたそうです。お母さまは身に覚えがなかったので、「いや、私じゃないんですけど」って言ったそうですが、そのときにやっと、自分の子どもが毎日どういう状況に置かれてきたのか、身をもって理解したそうです。

毎日毎日、子どもが叱られて、自分の息子はそういうことをしてないのに、クラスの中で騒動が起こると、常に自分の子どもが「それはあなた」と、自分のせいにされて怒られて帰ってくる。ある日、お母さまも、お子さんが経験してきたことと全く同じことを、身をもって体験する。そのことでやっと自分の子どもの気持ちも理解できて、子どものことをだんだん受け入れられるようになってくる。カウンセリングを進めていると、このようなことが不思議とパレルに起こってくるのです。さらにそうしたことが起こった後、Aさんは、「先生に叱られなくなったんだ」と言えて、「死にたい」ってことも言わなくなっていました。

この(資料の)障害とか問題は周りが作ると書いてありますが、結局このようになってみると、この子自体は、特に障害があるわけではな

いのですが、お母さまは、この子、何か障害を持っているんじゃないかってずっと思っておられたようです。しかし、結局、そのような死にたい、という訴えもなくなり、学校での先生から叱られることもなくなり、お子さんは受け入れられて、次第に学校がだんだん楽しくなって勉強もするようになった、というケースです。ただ、一つ、このケースは後日談があって、先生は他の子を叱るようになったということが実はありました。やはり子どもと先生の関係も子どもの問題と深くかかわる場合があります。この事例も、実は教師がお子さんの問題と深く関わっていたのですが、少なくとも保護者の方とお子さんは、会っていく中で、保護者が変わり、子どもが変わり、伏線として教師も（A君への接し方が変わっていった、という事例です。

次の事例は、これはやはり小学生のお子さんでしたが、家出を繰り返すというお子さんの事例でした。小学校低学年で家出を繰り返すとは一体どういうことだろうと、当時思いました。小学校高学年から中学生、高校生なら考えられますが…。今から30年ほど前の事例です。

そのお子さんはお父さまが相談室に連れて来られました。お父さまが相談に来るということも相談室ではあまりないことでした。それも少し変わっていると思いましたが、お母さまは働いておられて、お父さまは当時、失業中とのことでした。お父さまはお子さんが家出を繰り返し、そのたびお子さんが警察に保護されると呼び出され、警察に叱られるとのことでした。「おまえ何してるんだ、ちゃんと監督しろ。」と叱られ大変困っているということで、お父さまのほうは先輩がカウンセリング、私はお子さんとプレイセラピーをして遊びました。結論からいうと、このお子さんは1年ぐらいで家出がなくなっていくのですが、このお子さんは私と会う中で、ずっと私のことを「あんた」と呼びました。また、箱庭療法というのがあって、箱の中に砂があって、砂を掘って、湖とか海とか沼みたいにするのができ、そこに木や家や、人物や動物などのフィギュアを置いて、自分の庭、小宇宙みたいなものを作って遊ぶんです

が、その子にそれで遊んでもらったら、その子は箱の中に絶対作りませんでした。必ず箱の外に作るんです。そういうことをした子はその子が最初で最後でした。当時、私はまだ30代、相談室に行って数年たったぐらいだったので、その子となんて距離が縮まらないのか、多くの子は一緒に遊んでいるうちに、だんだん距離が縮まって仲良くなっていくのですが、この子は結局、家出は収まっても、最初から最後まで私のことは「あんた」でした。家出が収まったのはよかったと思いましたが、当時はそれがよく理解できませんでした。

今思い返せば、その子は虐待を受けていた可能性があったのではないかと思います。箱庭の中に自分の世界が作れないということは、その子にとって家の中は安心できる場所ではなかった、だからいつも外に箱庭を作る。それに箱の外に作るものは標識だけでした。あれは駄目、これは駄目という禁止マークです。今思えば、その頃、児童虐待の事例に接することはほとんどありませんでした。ましてや当事者が相談室に見えるということはまずないわけです。今振り返ればそう思えるということであり、真偽のほどは分かりません。これは最後まで推察の域を出ていません。ただ、そういうふうになると符合し、理解できることがいろいろあり、いろいろなお子さんや相談にのってきましたが、後になってそう考えると納得できる、ということがあります。この事例もそうで、深く心に残る事例でした。

他にもお話ししたい事例はあるのですが時間もないので、最後に、今、社会的にもトピックである、ダイバーシティに関わる事例、生きにくさを訴える30代の男性の事例をお話したいと思います。この方は30歳代でアメリカでライターをしておられ、本を沢山出版されたそうです。その方が相談室にいらして、「自分の周り、親戚は社会的に地位のある方々ばかり。父親、伯父さん、いとこ、皆さん、社会的地位の高い方々ばかりだそうです。自分はライターをしているため中途半端に思われており、非常に生きにくい、というご相談でした。私は女性だ

し、仕事を続ける中で女性であるが故のいろんな困難を感じることもありました。ですが、その方にお会いして、男性は男性で、一本引かれたレールの上をずっと走っていかないと「一人前」の男性として認められないと感じるのだ、ということ、その方から教えられました。その方は、「女性はいいですよ。結婚するかしないか、子どもを産むか産まないか、仕事をするかしないかって選べるじゃないですか。」とおっしゃいました。男性はそうはいかない、と嘆いておられました。男性、女性としてどう生きるか、どういう生き方をするのか、それぞれに生き方があり、悩みもある、ということを考えさせられました。

相談室で、2、3歳のお子さんから、上は孫のことを心配する祖父母で70歳ぐらいの方まで、いろんな方とお会いしてきました。そういう方々と出会う中で、一緒に問題を考え、たくさんの方のことを教えてもらったと思います。

人間をどう理解するか、人は相手によって変わり、様々な面をもっています。私たちはいろんな面を持っており、ジキルとハイド、本当に悪魔にもなれば天使にもなると感じています。私たちは相手との関係でいろんな面を持っているわけで、でも天使であろうと悪魔であろうと、それはだれもが持っている多面性、ということだと思います。

実際、今まで、お会いした方々で、本当に親切で心根の優しい人ほど、鬼のような面を持っているということも経験してきました。自分が学生のとときに恩師の臨床の先生から教わったことは、「性格は極端な人ほど逆にも極端」ということです。こちらにすごく振れる人ほど反対にも振れる。ものすごく細かいことを気にする人ほど、全然気にしない面がある。そういうふうに性格は振り子のように両面に揺れると教わり、そのように理解しています。

ここで谷川俊太郎の『わたし』という絵本を皆さんにご紹介したいと思います。読んだことがある方、いらっしゃいますか。ありがとうございます。ほとんどの方が読んでおられないようですので読ませていただきます。この絵本

は、授業の中で必ず学生に見せるようにしています。

わたし。  
おとこのこからみると、おんなのこ。  
あかちゃんからみると、おねえちゃん。  
おにいちゃんからみると、いもうと。  
おかあさんからみると、むすめのみちこ。  
おとうさんからみても、むすめのみちこ。  
おばあちゃんからみると、まごのみちこ。  
けいいちおじさんからみると、めいのみっちゃん。  
さっちゃんからみるとおともだち。  
せんせいからみると、せいと。  
となりのおばさんからみると、やまぐちさんのしたのおこさん。  
ごろうからみると、にんげん。  
きりんからみるとちび。  
ありからみるとでか。  
がいじんからみるとにほんじん。  
うちゅうじんからみると、ちきゅうじん。  
えかきさんからみるともでる。  
おまわりさんからみるとまいご。  
おいしゃさんからみるとやまぐちみちこごさい。  
レントゲンでみると??? (レントゲン写真)。  
おもちゃやさんへいくとおきやくさん。  
レストランへいくとおじょうさん。  
えいがかんへいくとこども。  
どこかのみちこちゃんからみるとおんなじなまえのこ。  
しらないひとからみると、だれ?  
ほこうしゃてんごくではおおぜいのひとり。

谷川俊太郎「わたし」福音館書店(1981)より

こういう絵本です。

このように、やまぐちみちこという子は一人の人間ですが、相手によってこんなにいろいろな面を持っているということ、子どもたちは絵本を通じて学んでいくわけです。授業の中ではこのように、私たちがいろんな側面を持っていること、相手によってそれが変わる、ということ、を伝えていきます。

それからこれは大分前に京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生が朝日新聞に書かれた記事ですが、霊長類の赤ちゃんはおむけに寝かせるとすぐぎゃあぎゃあ騒いであおむけに寝られない。だけど人間の赤ちゃんは、ちゃんとあおむけになって寝られる。これは私たち人間のコミュニケーションで、目と目のコミュニケーションが非常に重要なものなんだということを、霊長類の研究を通して示してくださっています。私たちはいろんな人と関わる中で、コミュニケーションをとっています。授業の中では、コミュニケーションをととても大事にしており、コミュニケーションというのは言葉だけではなく目と目を合わせる、特に視線ですね、視線というのが非常に私たちにとっては重要な役割を果たす、ということを授業で伝えるようにしています。

最後に私の臨床観をまとめたいと思います。私は、いろんなお子さん、不登校のお子さんにも会って話してきましたが、他者に認められる、受け入れられる、ということは非常に重要なことだと思います。それから、さきほどお話しした小学2年生の死にたいを繰り返した子のお母さまとお会いして、やはり親が子どもをどう受け入れるかということも非常に重要なことだと思います。様々な親子にお会いし、そういうことを考えるようになって、お母さまたちの子育てで支援するようになり、多くの保護者の方々にもお会いしてきました。そこで感じたのは、保護者の方々も「いい子」を演じている、ということでした。自分の子どものことでも悩んでいたり、突然子どもに熱が出たりしても誰にも相談しない。相談できない。だから結局、育児本を読んだりネットで調べたりして、だれにも相談せずに全部自分で対応しておられる。そうすると、どんどん追い詰められていく。そういう、人を頼れない、助けてって言えないということが非常に多いと感じています。実際、人に援助を求める、被援助志向性、援助希求ということが最近メンタルヘルスとの関係で指摘されるようになってきました。

それから人と物、空間との関わり合いですね。これも研究のことでお話ししますが、私たちは自分の部屋、自分の研究室というのを持っており、家に帰れば自分の居場所があると思います。一方、様々な不適應を抱えた方々は、どこにいても落ち着かない。どこにいても自分の居場所と感じられない、ということが多い。例えば不登校になったお子さんに、保護者の方とお会いして、お子さんと相談室に来てください、とお願いします。保護者の方に祖相談室に一緒に来てくださいとお願いする。そうすると、保護者の方々も異口同音におっしゃるのは、「先生、うちの子、忙しくてそんな暇はない」と言ってますと。ずっと自分の家において部屋に閉じこもっているのに「忙しくてそんな時間がない」と言われます。とても不思議ですが、お子さんの気持ちとしては、自分がここにおいても安心できない、いたたまれない、落ち着かない、そういう気持ちでいるのだらうかと、私はそんなふうに考えて話を聞いてきました。

ですから、私たちが自分の周りに何を揃えるか、どの部屋に何を置くか、どんな家に住むか、どういう場所、どういう地域に住むか。そういうことが私たち一人一人の行動や、安全、安心感に影響している、ということです。ですから、池田小でああいう事件が起こったときに、PTSD、皆さんも知っておられると思いますが、生き残り罪悪感があり、その場所に行けばやっぱり、そのときのことを思い出す。そこに絶対に行けないし、そのことがフラッシュバックするということが私たちには起こるわけで、そうしたことを考えずにここにいられる。じっとしていられるということ、自分と空間、環境の関係は、適応、不適應とすごく関係しています。

結局、こうした人との関わり合い、場所や空間、環境との関わりの中で、私たちは生き、そして自分を形づくり、形を変えながらも「自分さがしを続けている」と言えるのではないのでしょうか？ カウンセリングも、カウンセリングを通して自分探しをしている、ということだと思います。いろんな方とお会いして感じてきたことなのですが、結局相談に来られる方たち

は、自分の人生なのに自分を生きられていない。誰かのために生きていたり、何かを演じてきていたり、自分の時間なのにいつも誰かのために使っていたり。そういう方たちだな、と感じてきました。ですから、例えばお子さんとプレイセラピーで一緒に遊んだり、カウンセリングで40分とか50分一緒にお話しするわけですが、その時間は絶対にその人のための時間として私たちは共に過ごす。だからそこに来て、その時間を過ごす人は、自分の時間としてその時間を過ごしてくれないとカウンセリングは成り立たないと感があります。それは、ある方との面接で痛感したんです。その方はお子さんのことを心配して相談に見えたのですが、お子さんが不潔恐怖で何にも触れない。私たちは最初にお会いする時は、60分、場合によっては90分ぐらい、最初だけお話をお聴きしますが、その方はずっといろんな話をしてくれました。その方と初めてお会いし、私はずっと話を聴いていたのですが、終わったらとても疲れていました。結局その方は、申し訳なかったと思いますが、2回目から来なくなりました。そのことを今振り返ると、相手が思うように、相手が過ごしたいように過ごさせることが大事だと思ってきてそのつもりで面接したのですが、一方で、話し過ぎるということにも注意しなければならない、とつくづく思いました。その方の場合、実はそのお母さまも強い不潔恐怖症で。ですからその後のカウンセリングでは、話し過ぎる、ということに注意するようになりましたし、さらに、どのようにしたらその方が、あるいはお子さんが、過ごしたいようにその時間を過ごせるのかということを考えながら、お会いする時間を大切にお会いしなければならないといつも考えるようになりました。

もう一つ、この例と全く逆のエピソードで、あるカウンセラーから聞いた話ですが、ある時、中学生が、学校の先生から教育相談に行つて来いと言われて相談に来たそうです。それで、あるカウンセラーはその子に会った。ところが1時間会って、その子はひと言もしゃべらなかつたそうです。そのカウンセラーは

と、その子が何かしゃべるのを待っていたそうですが、でも待って待って、待って待って、結局1時間待ち続けて、その子はひと言もしゃべらなかつたそうです。それで最後に、「次もまた来てくれる？」って言ったら、「また来る」と言って帰つたそうです。後日そのカウンセラーは、生徒が何も話さなかつたのが心配で、学校の先生に連絡し、「その子、学校で何か言っていました？」と聞いたら、中学生は先生に、「すごく話しやすかつた」と言つたそうです。そしてその後も相談に来てくれて、カウンセリングは進んだそうです。

このエピソードからわかるように、カウンセリングで話すか、話さないか、話せるか、話せないか、さらに何を話すか、は一瞬一瞬で決まり、変わります。カウンセラーも同時に、相手が何を話してくれるのか、何か話してくれたら次どうするか、ということ、相手の話を中心に聴きながら考える連続です。どのような形で相手を配慮して、相手を大切に、相手にその時間を過ごしてもらうということは非常に難しい。そう簡単なことではありません。相談に来た方が「自分の人生を自分の主人公として」カウンセリングの時間を過ごしてもらえるように、専門用語でいうと自立性とか主体性、自尊心、自己肯定感といったような、そういうことがカウンセリングの中でその方の中に育まれるように配慮して会ってきました。

以上、私の臨床経験の一部をお話しさせていただきました。

次に、どんな研究をしてきたかについてお話ししたいと思います。

私が学生だった頃は、「自立」、女性も自立するんだ、という、そういう考えは小さい頃から持っていました。皆さんはご存じないかもしれませんが、70年代、学生運動がだんだん下火になって大学進学が増えていった頃でした。私が大学に進学した頃、大学進学率は何と16%です。人間学類の男女比は3対1で、今は、大学進学する人は50%ですから、当時は大学進学する人も、進学する女性も少なかつた。皆

さんにとっては信じられないでしょうし、昔の数字と言われると思いますが、そういう時代でした。ですから大学に行ったら自立すべきだと思っていましたし、アイデンティティーをどう確立していくかが人間の成長と発達だということを発達心理学で教わったので、自分自身もそのように考えておりました。セルフ、「自己」を確立していく、自分で自分のことを考えたり、自己コントロールしていくことを考えたときに、一番大事になるのが幼児期なので、発達心理学の研究室で学び、幼児の自己コントロール、「がまん」の研究を学類学生の時行いました。「がまん」することを子どもはどうしてできるようになるのか、どうしたら「待てる」ようになるのか、子どもががまんするってどういうことなんだろう、というようなことを研究しました。学類では幼児期の自己コントロールの発達、その後は大学院に進学後は、学習性無力感、つまり自己コントロールを失うってどういうことなんだろうということをテーマに研究しました。当時、学習性無力感の研究論文をアメリカの心理学者、セリグマン (Seligman, M.E.P.) が発表し、人がうつ状態になるメカニズムについて学習理論で説明したのですが、非常に明快で分かりやすく、発表される論文を次々読みました、セリグマンの理論によれば、うつ状態は学習されたものだと言われていました。一般に、失敗経験から挫折してうつになると考えられがちですが、人は失敗して、挫折経験がうつになる訳ではない、ということが実験で明らかになりました。

「自己」「セルフ」の研究は長い間続けてきましたが、その後、相談室でいろんな方にお会いして、子ども、大人、男性、女性、いろんな方とお会いする中で、結局、子どもたちの不適応の背景には人間関係があると考えようになり、それでソーシャルスキル、人間関係、人とのような関係を作っていくか、ということから、ソーシャルスキルの研究をするようになりました。これが1980年代が終わり1990年頃の話です。このソーシャルスキルの理論も「人と人との関わりは学習される」という考え方で

す。それまでは、人との関わり方は性格だ。内向性とか内気とか恥ずかしがりという言葉がありますが、人とうまく関われないということは「性格から来ている」と考えられていました。性格だから変わらないというふうにも考えられてきました。ですが、このソーシャルスキルの考え方は、「人と人との関わり方は学習される」と考えており、人との関わりが苦手だとか内気だとか、恥ずかしがり、ということも、結局人との関わりを経験する中で、その人が獲得しているものだ、という考え方です。

その後、ソーシャルスキルを研究を進める中でいろんな実験を行いました。この実験で非常に興味深いことを経験しました。私はそれまで大学や大学院で研究を進める中で、発達心理学や児童心理学の研究でも必ず性差とか学年差の比較検討をするのですが、特に性差にはあまり注意を払わずに結果を見てきていました。ですが、小学3年生から6年生までの児童を対象に対人関係の実験をしたところ、非常に興味深いことが起こりました。どういうことかと言えば、実験は、子どもたちのソーシャルスキルを事前に測っておいて、子どもたちを事前に測定した対人関係で適当に組み合わせ、男子のグループ、女子のグループを作って共同作業してもらおう、という実験でした。15分間待ってもらっている間、画用紙と色紙、はさみとノリで共同作業して何か作品を作ってもらおう、という実験ですが、実は、実験はその15分間、子どもたちの共同作業の様子を観察し、関わりを測定する実験でした。その研究から、非常に驚いたことは、グループでの人とのかかわり方が、男子と女子で全く違う、ということでした。男子は大体、遊び始める。おまえあれよとか、これやれよとかなすりつけ合って遊び始める。中には「みんな、やろうよ」みたいなのを言う子もいるのですが、大体は3年生も6年生も遊んでいます。ところが女子の場合は、大体、やってって言われたことはやるのですが、共同作業をしながら、「ねえねえ、さっきのお姉さんさあ」とか、実験助手で来てくれた大学院生の髪型とか服装などについて、いろいろおしゃべ

りを始めるんです。「きれいだと思わない？」とか、「あの髪型どう？」とか。本当に驚きました。男子は一切、ひと言もそういうことはありませんでした。

その後もソーシャルスキルの研究を行いました。男子と女子がグループで何かするとき、やっぱり女子は誰と集まるかが大事で、一方、男子は、集まって何をするか、のほうが大事なのです。つまり野球したい、サッカーしたい、じゃああいつ呼ぼう、みたいになるのです。しかし、女子はあの子と会いたい、あの子とおしゃべりしたい、そちらが先、ということ、ソーシャルスキルの研究を通して学びました。男子と女子ってこんな風に違うのだ、ということを知りました。当時の大学院生にそれらの結果を話したところ、「先生、全くそのとおりです。」と言われました。それがどれ位一般化できるのか、男女でこのように明解に分かれるのか、という問題はありますが、私の実験を通じた結果として聞いていただければ、と思います。

そんなことを通して、私は相談室に会うお子さんの、例えば不登校のお子さんだったら、女子だったらやっぱりその学校で、その子がいるなら学校に行きたいとか、それからあの子がこう言うってくれるから行きたいと思うような関係づくりを配慮するようになりまし、それから男子の場合は活動、これができるとか、あれをやってみたいとか、何に興味や自信がもてるかなど、そういうことが一つでも探せるようになり、そんなことを考えながら支援するようになりました。ただ、一般化には限界はあると思いますが。

それから子育て支援ですね。先ほどお話ししたように、保護者の方と出会い、結局、教育相談をやる中で、子どもたちの問題は、子どもが小さいうち、子育てのうちからやらないと駄目だと思ふようになり、「親教育」ということをもっと考えなければならぬ、と思うようになり、子育て支援をするようになりました。筑波大学の大塚にある教育相談室で10年間カウ

セリングをしていましたが、一人ひとりのお子さん、お母さまたちに会って話をするというのはやっぱり限界があり、グループで子育て支援を行い、グループの中でお母さまたちの様々な経験や知識をグループで共有し、それぞれのスキルとか知識がアップしていく、ということを行って来ました。私はこの中で、ファシリテータとして参加する人たちをバックアップするという役割を担いました。子育て支援でそんなことを行うようになり、茨城県内ではありとあらゆる場所、県北から県南まで、県西から県東まで行って、地域で育児支援をしてられる保健師の方々の力も借りて、保健センターや保健所で子育て支援を行って来ました。この活動を進める中でソーシャルサポートの力、グループの力、というのを感じ、グループ研究を進めるようになりました。

虐待のことでは皆さん、三世代伝達という言葉、聞いたことがおありかと思います。虐待は世代間伝達されると言われています。私たちは親としての子どもの関わりを多くを親から学んでいるのです。ほとんどの方は、たくさん保護者がいるわけではないので、自分の親、あるいは祖父母や場合によっては兄弟姉妹かもしれませんが、そういう方たちに育てられてきているので、限られた親子関係しか経験していません。ですから、自分のお子さんにとどう接するかという時、モデルになっているのはご自身のご両親、保護者です。そういう意味で、子育てをグループで支援するという事は、違う親子関係を学んでいく、ということにつながるのです、非常に有意義だと思っています。

さらに今、特別支援教育の連続性ということについて大学院生と一緒に研究を進めています。小学校の先生、中学校の先生、高校の先生にお会いして、小中、それから中高の連携についていろいろ話を聞いておりますが、お話を伺って感じているのは、小中学校、義務教育段階と高校の教育段階の間に、すごくギャップがある、ということです。小中学校の教育と、中高の教育が連続していません。小中学校の教育

においては、やはり中学校は受験のことが出てきて、特別支援を必要とする生徒の皆さんが、あまり配慮されていないと感じています。やはり特別支援教育が進んで、普通のクラスに特別な配慮を必要とする生徒さんがいるわけですが、その方たちの合理的配慮とか、教育についてはまだまだ考えていかなければならないことがたくさんあるなど感じます。

私は、学生や大学院生の皆さんと一緒に、高校で生徒支援もしてきました。その高校には、小・中学校で不登校だったり、いじめを受けたり、発達上の障害を抱えた生徒さんが多く在籍する高校です。学校が嫌いだ、行きたくなかったという生徒がたくさんいました。ですから、高校もいやいや入学、こししか入れないということで高校に入学して来るわけです。そういう高校で学生と一緒に生徒さんたちの支援をしてきました。その高校はむしろ、そういう生徒さんを配慮する方針の高校で、中学、高校の連携というのは、他の学校よりは多分よくできていると思います。高校の先生が進んで中学校から情報を得ており、そのような高校で学生と一緒に生徒支援を進めている中で、小中学校の教育が高校に積もり積もってつけとなっている、ということをしみじみ感じてきたところです。

90年代後半、教育に大きな転換と（資料に）書いたのですが、カウンセリングや心理療法というのはずっと限られた方たち、問題や困難を抱えた方たちのためのものだったんですが、先ほどお話ししたセリグマンがうつの研究からポジティブ心理学を打ち立て、もっと「一人一人が持っている良い面」を見い出し、その人が持っている「強さ」に焦点を当てて行こう、という考え方がアメリカで台頭してきました。セリグマンはその後、アメリカ心理学会の会長になりますが、その頃（1990年頃）、ちょうど國分康孝先生の「育てるカウンセリング」という記事が朝日新聞に掲載され、カウンセリングをもっと教育に活かして行こうということが盛んに発信されるようになりました。また、「レジリエンス」という言葉、皆さん知っていると思

いますが、東日本大震災もそうですが、私たちのいろいろな困難を乗り越える力、今、コロナもそうですし、戦争も起きていますが、そういういろんな困難や未経験の困難、そういう困難を乗り越えていく力、それを育てていく教育をしていこうという考えがなされるようになってきました。ポジティブ心理学は、当時からそのことを示していました。ですから、治す（治療する）、から（教育に）、生かすということ、それぞれ一人一人が経験してきたことを、あるいはそのトラウマを経験したことも含めて、トラウマをその人の成長の力にしていこうというような考え方が最近注目されています。

学校予防教育、これは学校心理学の考え方ですが、全ての子ども、一部の困難を抱えている子ども、それから困難をずっと抱えている子どもにサービスをしていきましょう、というのが、学校心理学における1次的、2次的、3次的援助サービスの考え方です。先ほどお話ししたように、今、学校支援というのを小中学校で進め、ピア・サポートをやって、友達が友達を支える、そして安心できる人間関係づくりというのを進めています。今の子どもたちは人と関わることが強いストレスになっているので、なるべく人と関わらないようにしてる、というのが今の子どもたちの現状です。ですから、ソーシャルスキル教育で子どもたちに「何を教えてほしいですか」って聞くと、「断るスキルを教えてください」と言われます。つまり誘いを相手に不快な思いをさせずに断って関わらないで済むスキルを教えてください、と言うわけです。子どもたちは友だちに誘われても断れない、という悩みを抱えているわけです。こちらはできるだけ安心して人と関われるスキルを教えようと思うわけですが、子どもたちが望むのは関わらずに済むスキルなのです。

話が逸れましたが、先ほどお話ししたように、高校でも大学院生や学生と一緒にずっと生徒の学校生活支援をしてきました。この高校に来た小中学校で困難を抱えていた子どもたちは、学生と会って、学生といろんな関わりをす

る中で、学校が楽しくなって進学する生徒も出て来ております。大学院生が高校に来てくれてよかった、といろんな生徒が言ってくれますし、この支援に携わった学生の皆さんも、修士課程を修了して教師になった方々は、高校でこういう子どもたちに会えて本当によかったと言っております。ここにいらっしゃる勝田先生もその活動に参加してくださったお一人です。ありがとうございました。学生と共に支援活動を始めて10年が経ちました。今、高校はとても落ち着いていて、学校の中もとてもきれいになり（当時はとても荒れていた）、丁寧に子どもたちに関わっていけば、子どもたちは変わるんだ、ということが明らかになりました。これは私が考えている学校支援のプログラムですが、参考にしてもらえればと思います。

最後、あと5分ということなので、私の筑波大学35年の最後に、皆さんにお伝えしたいと思います。

私は1975年入学の人間学類1期生なのですが、筑波大学は1974年に開学しました。1つ上の高校の先輩が大学に推薦入学で入り、高校の先生も「筑波大学は新構想でできた大学だから面白い大学だ」と勧められました。それから高校の同期生のお父さまが新聞記者で、私が高3のとき「心理学に興味がある」と言ったら、「うちに心理学の本があるから持って来てあげると言っ、本を貸してくれました。その本を読んで、「あー、面白い」と思って筑波に行こう、と考えたわけです。

実際、入学の時は体芸棟の体育館で入学式がありました。当時の学長、三輪学長が、ようこそ筑波大学へ、とおっしゃって、筑波大学は学際的な研究を進める大学である、それから、国際A級を目指す、とおっしゃっておられました。学生は、国際A級は難しいよね、などと言いながら、しかし、確かに私たちは新構想大学で学際的な教育が受けられたと思います。私たち1期生は本当に筑波大学に入ってよかったと思って学生時代を過ごしました。思い出の授業として、井坂行男先生の「教育臨床学」の授業

が思い出されます。井坂先生の教育臨床学は昭和50年度、開学当時からあった授業で、教育相談事例や人間観についていろいろお話しくださり、本当に興味深い授業でした。それからデューイの、School and Society、これを下村先生が教育の専門科目の英書講読でご担当下さったのですが、デューイのSchool and Societyは高校卒業したばかりの当時の私にはすごく難しかった上、下村先生の日本語が早口すぎて。ご存じの方もおられると思いますが。ですから英語も分からない下村先生の日本語も分からない、で、本当にちんぷんかんぷんでした。教育学も面白そうだ、と思って大学に入学しましたが、なんか全体によくわからなかったというのが当時の私の教育学の印象で、結局、心理学を専攻することに決めました。

学生時代は臨床心理学を学びたい一心で、自閉の子どもたちの支援をしていました。

それからこれを見てください（当時の写真）。これが宿舎で、体芸棟が向こうに見えますね。この写真のように宿舎と体芸棟をひたすら往復するという学生時代で、雨が降ったらこの通学路がびちゃびちゃで、革靴がいくつ駄目になったか分からない。また、なぜか行きも帰りも向かい風で、筑波おろしが本当にすごかったです。帰って、宿舎のお風呂に入って頭を洗うと砂だらけという、そんな学生時代でした。

（筑波大学写真提示）

これは1976～1977年頃の大学全景です（写真）。ここに見えるのは病院のようです。ここが追越宿舎で、この松の向こうにあるのが天久保池、これが体芸棟ですね。（写真）これがまだ一学（第一学群棟）ができた頃だと思います。そんな写真を「筑波大学アーカイブ」で写してきました。これは昭和54年頃の大学、本当に原野みたいな所で学生時代を過ごしました。これが筑波大学の図書館で、1979年、大学院の1年のときにやっとできました。学部の3、4年のころは、教育大の学生が卒業するまで（つまり昭和54年3月まで）は、関連の専門書が筑波に来ませんでした。ですから海外の論文を読みたいときは、国会図書館に行って論文をコ

ピーするという、今では信じられないことをしなければなりません。国会図書館は開架式ではないので、読みたい文献をお願いして、午前と午後、それぞれ3本しかコピーしてもらえませんでした。ですから丸1日いても6本しか論文が手に入らないという、そんな時代でした。それからもう一つ。大学院生になって初めて行った日本心理学会1978年9月、その学会でスキナー（Skinner, B.F.）の行動理論に関する講演を聴きました。

それから教育学系に異動前、東京キャンパスで昼は相談室で相談を行い、夜は夜間大学院で10年、教えました。夜間大学院では終電まで指導するという行っておりまして。井田先生が紹介して下さったように、谷川先生が人事委員長で、教育学系に異動させていただきました。本当に学系長桑原敏明先生、それから研究科長山内先生、同時に宮崎大学から着任されたのが宮寺先生、堀和郎先生で、お二人には同期として大変お世話になりました。この場を借りて学系長、研究科長、そして同期のお二人の先生、人事委員長の谷川先生には改めてお礼申し上げます。

最後に、私は教育学系に異動するときに夢を見ました。それまで大学で行動理論を学んだので、あまり精神分析に興味がなかったのですが、非常に印象的な夢を見ました。その夢は、川を渡ると、渡った先に満開の桜が咲いているという夢でした。その夢を見た日に、人事委員長の谷川先生から、人事委員会で通りました、という連絡をもらいました。川を渡る、海を見る、という夢は人生の大きな転機を象徴すると言われていますが、その夢は本当にすてきな夢でしたが、その後になんかそういうことが起こったので、精神分析の勉強もするようになりました。その後、人間総合科学研究科ができて、門脇先生、飯田先生、水本先生そして2005年には岡本先生を迎え、異分野の教員4人で院生を指導してきました。

ここに名前を挙げた皆さん（24名）は、大学院博士課程教育学専攻とヒューマン・ケア科学専攻で学位を取られた方々です。いろんな出

会いがあり、皆さんに心から感謝しています。それからいろんな出会いにも恵まれました。中国の留学生の崔さん、王さん、それからカウンセリング研究科、教育研究科で修論を書いた後、学位を取得された方々もおられます。また、学校の先生で中学校や高校の先生をして大学院で学び、学位を取得した方もおられます。さらに学校支援では、博士課程の江角周子さん、新井雅さん、高橋智子さんが、一緒に学校支援をやってくれました。本当に感謝しています。また、12月、歓送会を開いてくださった教育学域の女性の先生方、本当にありがとうございました。深く感謝します。最後にこの仕事を35年間続けてこられたのは、家族が応援してくれたからで、家族にあまり感謝したことがないので、この場を借りて感謝します。

これが最後になりますが、このような機会を与えていただいた教育学域の先生方、大変お世話になりました。皆さまのご活躍、ご健康を心からお祈りします。本当に長い間、ありがとうございました。

A- 庄司先生ありがとうございました。先生の35年間の仕事とご研究を具体的に分かりやすくご説明いただいて、大変参考になりました。ではお一人、お二人ほど質疑応答をしたいと思いますが、先生方がいかがでしょうか。それと、Zoomでご参加の方、ご質問ありましたら挙手機能でご質問いただけたらと思います。

（無言）

A- いかがでしょうか。じゃあ司会から、先生のご専門で、カウンセリングをされるという場合、とても勉強になったんですけども、私のように素人が学生さんから話を聞く際に、何かアドバイスみたいなもの、いろいろ教えていただきたいなと思ったんですけども。

庄司 先生方、本当に学生さんも相談に来ること多いと思います。学生、いろんな悩みを抱えておりますし、私もいつも学生の話聞きながら、この学生はカウンセラーの私に相談してるのか、教師としての私に相談してるのか

か、母親みたいな気持ちで相談しているのかと、いつも迷います。でも大学の研究室で話を聞くときは、カウンセラーではなく、指導教員として話を聞くようにしています。ですから、先生たちもどういう立場で話を聞くのか、ということがなければ、やはり先生方は指導教員としてお話を伺ったらいと思います。ただお話を伺うとき、先ほどよりお話ししたように、待つという、やはり相談に来る人というのは、話そうか、話をするのをやめようか迷っているんです。どれくらい相手が話を聴いてくれるかで、話す内容を決めていくんです。ですから、やはり、できるだけ話に来た学生の時間になるように配慮して、その学生が話したいことが話せるようにしてほしいと思います。教師だとどうしても、ああしてほしい、こうして欲しい、こうしたほうが望ましいというのがあると思うので言ってしまうがちなのですが、それはまず置いておいて、まず学生の気持ちを聞くという、一番言いたいことはどんなことなのかとか、あるいはどう言ってほしいか分からないときは、「私にどう言ってほしい?」「私にできることある?」とか聞くこともあります。そのようなところでしょうか。